

カナダ環境事情調査団に参加して

(社)日本環境衛生施設工業会 国際環境整備研究委員会 幹事
調査団 副団長 河端 博昭
(株)神鋼環境ソリューション 技術本部 本部長代理)

はじめに

国際環境整備研究委員会は、JEFMAの平成15年度事業計画で承認された海外環境事情調査として、平成15年10月5日から10月11日の7日間に渡り、カナダ西海岸のバンクーバー地域を中心に、バイオマス等新エネルギー利用技術に関する調査で総勢12名を派遣した。

同委員会からの海外調査団は、今回で4回目となるが、訪問先としては既に多くの調査報告例があるヨーロッパ方面ではなく、北米地域のカナダ

を選択した。調査先はカナダ大使館の協力も得ながら、ベンチャー企業等の新しい技術的な取り組みを中心に選定した。

詳しい視察先の報告は、近くまとめられる調査団の報告書を是非ご一読いただきたいが、以下にその視察状況の概要について紹介する。

視察の概要紹介

調査団一行は、10月5日(日)午後4時過ぎに、九州、大阪、名古屋および東京地区から各団員が



写真1 プリティッシュ・コロンビア大学研究開発センター前にて(筆者は前列右から2人目)

時間通り成田空港に集合し、結団式を行った。バンクーバーへは、18時20分発のJAL018便で、日付変更線を越えて約8時間を要し、同日の午前10時頃には到着した。気流に乗り1時間近く早い到着で、エコノミークラスの席からようやく解放された。幸先がよいと思ったのも束の間、入国審査までにSARS（サーズ）やテロの影響と思われるチェックがあり、さらに、入国審査でも予想を超える時間を要した。2時間近くも入国に手間取った団員もあり、旅程の都合で添乗員だけが待って、後で合流するという変則な形でカナダ国内の旅は始まった。しんどい目にあつた方には申し訳ないが、これで団員が1つにまとまったともいえ、後々もこれで良く盛りあがった。

今回の日程は詰まっており、バンクーバー市内の視察は、到着初日に時差ぼけ調整を兼ねた市内移動時間を利用して行い、空港からホテルのあるバンクーバー・ダウンタウンへの移動で少し回り道をしてもらった。

400ヘクタールもある広大なスタンレー公園では温帯雨林（レインフォレスト）の巨木や原生林の緑で自然を、また、トーテム・ポール・パークではカナダ・インディアン文化の一端を垣間見た。今度機会があれば、是非、カナダの大自然に触れるべく、カナディアンロッキーなどを訪れたいものである。

チャイナタウンやグランビル・アイランドなどのエリアは、この町の活気を示すもので、ぶらりと散策できれば楽しい所といえる。ダウンタウンの中心は、一面がガラス張りの高層ビルが立ち並ぶビジネス街、繁華街で、闊歩する人達を見ても、ヨーロッパなどで受ける印象ではなく東京のビジネス街と似た雰囲気を感じ、不思議と違和感が無い。

今回、視察中は同じホテルに連泊できたのでずいぶんと楽であったが、時差の関係で真夜中に目が覚めるのには苦笑してしまった。しかし、深夜の何時になってもビルには照明がついており、雨

に濡れたダウンタウンの夜景もなかなか良かった。

行く先々で、視察団が雨を連れてきてくれたと喜ばれたが、相当の水不足状態が続いていたようで、給水制限の話も聞いた。結局雨は視察中、毎日のように付いて回ったが、視察で難儀したとの印象は薄い。

視察第1日目は、広々とした牧場、農地の一角にはぽつんと建つ木造の2階建ての事務所で、社名さえ判らないような所であった。このFirst American Scientific社で窓口になってくれた方は、北大の衛生工学の修士を卒業したなかなかの好青年であった。加熱源を必要とせず、木質、下水汚泥や鶏糞等バイオマス類の乾燥粉碎装置を中心に、エネルギー回収や乾燥粉末の有効利用などの研究開発を進めていた。我々のために、実機に近い装置で各種対象物によるデモンストレーションをしていただいた。是非、日本にもこのシステムを広めたいと熱っぽく語ってくれたのが大変印象に残った。ビジネスがうまくいって、日本とカナダの掛け橋にもなってほしいと思う。

次に向かったAltek Power社の工場は、これまで空軍の飛行場に隣接した木造の古い工場棟を現在改築中で、一瞬道に迷ったかと不安になった。倉庫のような状況の工場の一角には、組み立てがほぼ終了した1.2MWのタービン発電装置が一台あった。この発電機は、中古のヘリコプターのタービンエンジンを再生利用したもので、車載できるほどに軽量、コンパクトな装置であった。燃料は、メタンガスや液体燃料も使用できるとの事で、系統電源に繋がられない栽培温室等での分散型自家発電と熱供給を市場と考えている様である。訪問の日に契約がまとまったとの話を聞き、新しい門出に立ち会えたのは嬉しかった。この技術も、テロの関連で航空機関係が不況になり、買収した技術との事であった。色々と影響が及ぶものである。